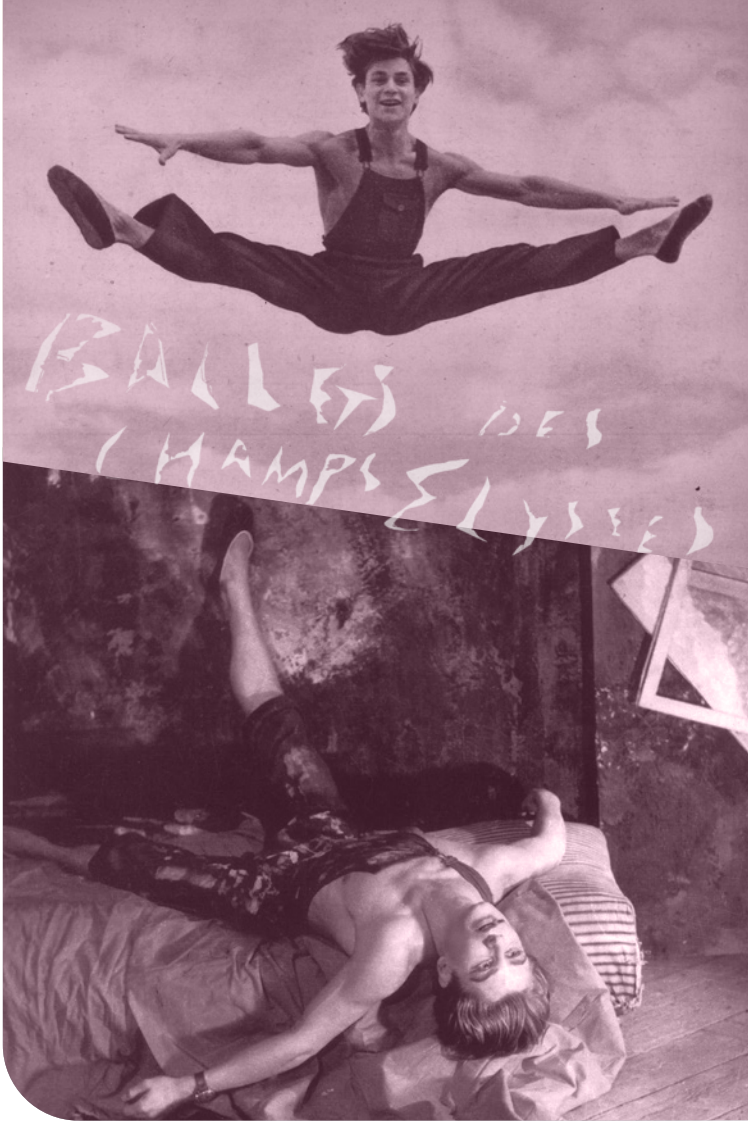
主な出展リスト

- ◆ プログラム／ソワレ・ド・バレエ／サラ・ベルナール劇場／フランス／1945年6月〈PR-51 SDB〉
- ◆ プログラム／バレエ・デ・シャンゼリゼ／シャンゼリゼ劇場／フランス／1945年10月〈PR-108〉
- ◆ プログラム／バレエ・デ・シャンゼリゼ／シャンゼリゼ劇場／フランス／1946年3月〈PR-109〉
- ◆ プログラム／バレエ・デ・シャンゼリゼ／シャンゼリゼ劇場／フランス／1946年4月〈PR-110〉
- ◆ プログラム／バレエ・デ・シャンゼリゼ／シャンゼリゼ劇場／フランス／1946年6月〈PR-705〉
- ◆ プログラム／バレエ・デ・シャンゼリゼ／シャンゼリゼ劇場／フランス／1946年12月〈PR-111〉
- ◆ プログラム／バレエ・デ・シャンゼリゼ／シャンゼリゼ劇場／フランス／1948年11月〈PR-112〉
- ◆ プログラム／バレエ・デ・シャンゼリゼ／シャンゼリゼ劇場／フランス／1949年4月〈PR-113〉
- ◆ プログラム／バレエ・デ・シャンゼリゼ／シャンゼリゼ劇場／フランス／1950年6月12日〈PR-115〉
- ◆ スクラップブック／ジャニーヌ・シャラ、ローラン・プティ／1942-44年〈SB-20〉
- ◆ スクラップブック／ジャニーヌ・シャラ、ローラン・プティの新聞・雑誌記事／1943-44年〈SB-21〉
- ◆ スクラップブック／1945年のバレエ・デ・シャンゼリゼの新聞・雑誌記事／1945年〈SB-22〉
- ◆ スクラップブック／バレエ・デ・シャンゼリゼ／1945-46年〈SB-23〉
- ◆ スクラップブック／ローラン・プティ1945年／1945-46年〈SB-24〉
- ◆ スクラップブック／バレエ・デ・シャンゼリゼ／1946年〈SB-28〉
- ◆ 雑誌／『バレエ』vol.1 No.6／イギリス／1946年4月〈MG-0553〉
- ◆ 雑誌／『バレエ』vol.3 No.5／イギリス／1947年〈MG-0907〉
- ◆ 雑誌／『バレエ』vol.4 No.1／イギリス／1947年7月〈MG-0908〉
- ◆ 写真／『薔薇の精』を踊るナタリー・フィリッパールとジャン・バビレ／撮影：H. ロジャー・ヴィオレ／フランス／1946年〈PH-D-204〉
- ◆ 書籍／『ジャン・バビレ』フィリップ・ミニャーナ著／フランス／1982年〈BK-053-bio〉
- ◆ 書籍／『ローラン・プティ：振付家と画家たち』ジェラール・マノニ著／フランス／1990年〈BK-2785-bio〉
- ◆ 書籍／『ジャン・コクトーのダンス・シアター』フランク・W.D. レイス著／アメリカ／1986年〈BK-289-pie〉
- ◆ 参考：書籍／『ダンス・イン・パリ：バレエ・デ・シャンゼリゼ、国際フェスティバル』マルセル・シュナイダー著／フランス／1982年〈NF〉
- ◆ 参考：書籍／『パリ・オペラ座のローラン・プティ：ダンスの遺産』アレクサンドル・フィエッテ編／フランス／2007年〈NF〉
- ◆ 参考：DVD／『カルメン／若者と死』／パリ・オペラ座バレエ／TDK／2005年〈NF〉

※〈NF〉は、提供：深澤南土実

主な参考文献

- ◆ Gérard MANNONI（Éd.）, Roland Petit: Ouvrage conçu et réalisé, L'avant-scène Ballet/Danse（Paris,1984）
- ◆ Marie-François CHRISTOUT, "Les Ballets des Champs-Élysées: A Legendary Adventure", Dance Chronicle, Vol.27（2004）: pp.157-198
- ◆ 深澤南土実『バレエ・デ・シャンゼリゼ：第二次世界大戦後フランス・バレエの出発』法政大学出版局、2020年



Kenji Usui Ballet Collection

Les Ballets des Champs-Élysées

～A Legendary Ballet Company～

2025/9/17（Wed.）～2025/10/13（Mon.）

（2025/10/13は祝日開館日です。休館日はwebでご確認ください）

◎ 企画・監修
関 典子（せき・のりこ／薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター）
Noriko Seki（Curator of Kenji Usui Ballet Collection）
舞踊家・振付家・舞踊研究家。幼少よりクラシックバレエを学び、18歳でコンテンポラリーダンスに転向。お茶の水女子大学大学院博士後期課程を経て、現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。日本ダンス評論賞・兵庫県芸術奨励賞・神戸市文化奨励賞・お茶の水女子大学賞小泉郁子賞など受賞。

◎ 企画・協力・テクスト
深澤 南土実（ふかさわ・なつみ）
Natsumi Fukasawa
ダンス研究家。お茶の水女子大学大学院博士後期課程博士号（人文科学）取得修了。現在、芸術文化観光専門職大学専任講師として、ダンスの理論と実践をつなぐ教育と研究を行う。単著に『バレエ・デ・シャンゼリゼ：第二次世界大戦後フランス・バレエの出発』（法政大学出版局 2020年）。

アシスタント：若林絵美（Emi Wakabayashi） 後藤俊星（Shunsei Goto）

兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二 バレエ・コレクション 担当
〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22 tel：0798-68-0223（代表） fax：0798-68-0212

禁転載・複製・引用

Kenji Usui Ballet Collection

薄井憲二 バレエ・コレクション
2025企画展

バレエ・デ・シャンゼリゼ

～ 知られざる伝説のバレエ団 ～

2025/9/17（Wed.）～2025/10/13（Mon.）

（2025/10/13は祝日開館日です。休館日はwebでご確認ください）

80年前にパリで生まれた伝説のバレエ団、バレエ・デ・シャンゼリゼ（1945-51年）。バレエ・リュスを継承しながらも、シャンゼリゼ劇場を拠点に、第2次世界大戦後のパリの状況を濃密に投影し、リアリティがあり同時に幻惑的でもある新作を発表しました。再演され続けているローラン・プティ振付の《ランデヴー》や《若者と死》はこのバレエ団の代表作で、若者たちの感じる閉塞感や不安、孤独、愛と死という究極の表現が、今もなお観客たちを惹きつけています。

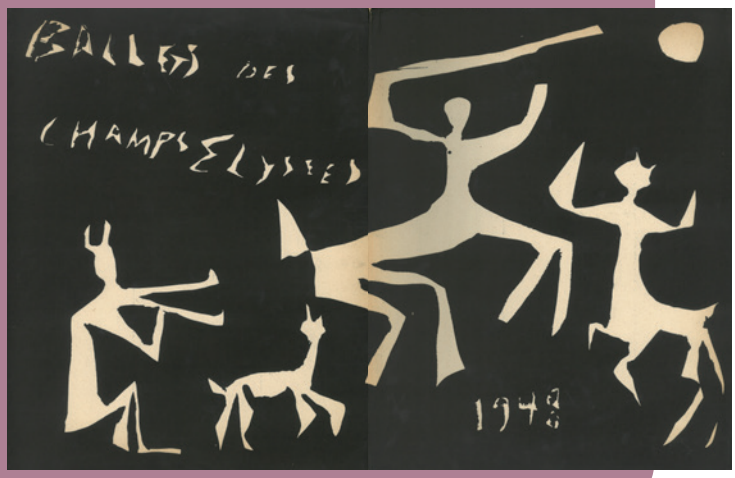
本企画では、多くのアーティストが関わった色鮮やかなバレエ団のプログラムや貴重なスクラップブックを中心に展示し、当時のバレエ界に新しさをもたらした、知られざるバレエ・デ・シャンゼリゼの魅力を紹介したいと思います。

Hyogo Performing Arts Center

バレエ・デ・シャンゼリゼ
Les Ballets des Champs-Élysées
（1945年8月-1951年11月）

バレエ・デ・シャンゼリゼ誕生のきっかけは、天才少女として知られていたジャニーヌ・シャラとローラン・プティによるダンス・リサイタル（1942-44年）そしてプティのソロ・リサイタル（1945年3月）の評判でした。バレエ・リュスでセルゲイ・ディアギレフの秘書兼台本作家であったボリス・コフノが芸術監督、プティはメートル・ド・バレエ。ダンサー達は皆若く、新鮮で洗練され自由に満ちあふれたバレエ団がシャンゼリゼ劇場に誕生したのです。プティは大衆的要素や娯楽性をバレエに取り入れ、大胆でアクロバティック、かつエロティックな振付、そして即興的な要素を含んだ作品も発表しました。

また、詩人のジャック・プレヴェールやジャン・コクトー、画家のパブロ・ピカソやマリー・ローランサン、クリスチャン・ベラール、ファッションデザイナーのクリスチャン・ディオールなど一流アーティストたちと協働し、プログラムの序文を哲学者ジャン＝ポール・サルトルが書くなど、当時のパリに集う芸術家たちの交流が垣間見えます。



パブロ・ピカソの版画のプログラム〈PR-112〉

マリー・ローランサン画のプログラム〈PR-108〉

クリスチャン・ベラール画のプログラム〈PR-109〉

クリスチャン・ベラール画のプログラム〈PR-110〉

スタニスラオ・レプリ画のプログラム〈PR-111〉

マリー・ローランサン画のプログラム〈PR-705〉

《ランデヴー》（Le Rendez-vous）

［ 台本 ］ジャック・プレヴェール
［ 音楽 ］ジョゼフ・コズマ
［ 振付 ］ローラン・プティ
［ 舞台幕 ］パブロ・ピカソ
［ 美術 ］ブラッサイ
［ 衣裳 ］メイヨー
［ 初演 ］1945年6月15日　サラ・ベルナール劇場
［ 出演 ］ローラン・プティ、マリーナ・ド・ベール、ダニエル・セリエールほか

《ランデヴー》は、パリの片隅に生きる、貧しくも夢見る若者の運命的で残酷な姿を映し出した作品です。ローラン・プティが同1945年に公開された映画『天井桟敷の人々』の台本を担当した詩人のジャック・プレヴェールにアイデアを依頼し、この作品が生まれました。初演時の公演プログラムには台本の一部が掲載されています。写真家ブラッサイの写真を舞台美術に使用するアイデアもプレヴェールのものでした。この作品の成功もバレエ団結成をより推し進めたのです。

《ランデヴー》ローラン・プティ、マリーナ・ド・ベール〈SB-22〉

《若者と死》（Le jeune homme et la mort）

［ 台本 ］ジャン・コクトー
［ 音楽 ］ヨハン＝セバスチャン・バッハ
［ 振付 ］ローラン・プティ
［ 美術 ］ジョルジュ・ワケヴィッチ
［ 衣裳 ］カリンスカ
［ 初演 ］1946年6月25日　バレエ・デ・シャンゼリゼ、シャンゼリゼ劇場
［ 出演 ］ジャン・バビレ、ナタリー・フィリッパール

バレエ・デ・シャンゼリゼを象徴する作品《若者と死》は、「伝説のクリエーション」「傑作」と評され、ミハイル・バリシニコフら名ダンサーに踊り継がれてきました。この作品はしなやかなジャンプと確かな技術を持つバレエ団のアイドル、ジャン・バビレのために創作されました。詩人のジャン・コクトーは「バビレにはワツラフ・ニジンスキーの持っていた活気が豊かに息づいている」と認め、台本を担当するばかりか振付にも積極的にアドバイスしたのです。

ジャン・コクトー画《若者と死》〈NF〉

ジャン・バビレ〈PR-111〉